

2010.06.28 「保守の原点を問う 1」

こんにちは、参議院議員の西田昌司です。

選挙期間中は、ホームページにおいて選挙に関することを更新できません。その間、私の事務所の中を写しながら、私が保守的な考えをするようになった理由を皆様方にお話していきたいと思います。

今、映っているのが私の京都の事務所です。ここに、表装された原稿が掛かっています。この原稿は、西部邁先生が、私が最初に書いた本のために書いて下さった巻頭の言葉を表装したものです。今から 12 年前の平成 10 年に出した本（政論）に、西部先生が序文を書いて下さいました。その後、政論Ⅱにも西部先生に序文を書いていただいております。そして、今年、西部先生、佐伯先生と一緒に、『保守誕生』という本を出しました。また『発言者』という雑誌がありまして、この号の表紙には私の名前も載っていますが、これは西部先生がずっと出しておられた雑誌です。ここに、2 年に渡って連載を持たせて頂いたことがあります。こうした言論活動を通じて、私は保守的な考えが、自分の考えとして身についてきたと思っています。

平成 10 年に出版した私の第一冊目の著作である『保守の原点を問う 政論』に、西部先生が序文を書いて下さったのですが、この序文が現在の政治の状況を非常に良く表しています。今、この序文を読ませて頂いて、皆様方にこの 12 年間で、日本の政治というものが、全く本質が変わらないままに迷走しているということを伝えたいと思います。では、読み始めます。

「保守の俊英よ、救国の戦線に躍り出よ。」政治の本質は、不確実な未来に向けて、計画の決定を下すことである。言い換えると、危機管理における指導力、これが政治家の具有すべき最大の資質なのだ。こんなことは常に広く確認されているはずなのに、有能な政治家が輩出しないどころか、政治家失格としか言いようのない人々によって議会が占拠されているのはなぜか。それは、危機管理といい、指導といい、通常に思われているよりもはるかに困難な作業だからである。危機とは、容易には管理し難き事態のことを指す。ここでいう管理というのは、合理的な処方によって問題を解決することである。つまり、テクニカルナレッジ（技術知）などによっては対処しきれない危機に他ならない。それゆえ管理しがたき事態を管理するという意味で矛盾多き作業である危機管理においては、技術知だけではなく、プラクティカルナレッジ（実際知）が要請される。経験にもとづく、合理的には説明しきれない実際的な知恵、それがなければ、危機管理、政治の本務は上手く果たし得ない。

また、リーダーシップというのも、単に決断における勇気とか敏速さのこののみを指すのではない。政治は、言うまでもないことだが、集団的な意志決定に関わる事柄だ。従って、集団に対してパースウェイジョン（説得）が施されていなければ、どんな決断も無効に帰する。この間の、いわゆる政治改革の騒ぎにおいて、辣腕を謳われながら全ての計画に失敗する著名政治家がいたが、それは彼にこの説得の力量が欠けていたからだろうと思われる。

私の友人、西田昌司氏は、政治家としてはまだ若年に属する者であろうが、技術知に加う

るに実際知を、そして決断力に加うるに説得力を持つ政治家である。既成の中央政治家が、この改革騒ぎの高波に呑み込まれ、次々と政治の本質を見失い、政治の本務を奉擲していくなかで、西田氏のように、有望な若き政治家に会えたのは、私という知識人にとって大きな励ましとなっている。西田氏は、大変な勉強家であるために多くの技術知を蓄えている。つまり、情報を筋道立てて整理する能力を備えている。だが、氏はそうした技術知の水準において満悦はしない。地方政治家としての現場の政治経験に基づいて、技術知を実際知に有効たらしめるための知恵を、つまり実際知を氏は身につけてきたし、今後ともそれを強化して行くであろう。また西田氏は、果敢な人ではあるが、決断において独走することを慎重に避けようとする。そうであればこそ、周囲を説得しようとする氏の努力は並のものではない。念のため申し添えておくが、説得とは単なる根回しのことではない。計画あるいは政策をめぐり、理念を掲げ、理屈を明示し、手続きを確定し、人々の感情に配慮する、という総合的な言語活動、これが説得である。西田氏の言葉遣いは、そうした総合化を意識して組み立てられているせいなのであろう、論理性と感情性、大胆さと繊細さ、誠実さと諧謔味といった様々な二面性の間でよくバランスを保っている。

氏はもちろん自由民主党の政治家である。いや、自由民主という政治理念を的確に理解している数少ない自由民主党員の一人だというべきであろう。自由は秩序なしには放縱に流れる。そして、自由と両立する秩序はなにかとなると、それは歴史的なるものとしての価値や規範でしかありえない。というものの、自由の基礎たる各人の個性もまたこの歴史的なるものの中で成育すると思われるからだ。さらに、民主は健全な世論―それをかつては輿論と記した―なしには、単なる多数者の専横に終わる。そして輿論とは何かというと、それもまた歴史的なるものとしての人々の良識のことだ、としかいいようがない。自由といい、民主といい、その本来の姿は保守的なものである。つまり、歴史的なるものを保守するという意味での―いいかえると、アメリカ流ではなくヨーロッパ流の言葉遣いにおける―保守であるべきなのが日本の自由民主党ではないのか。というものの、我が国は、ヨーロッパ諸国にも増して歴史的なるものの宝庫だからである。残念ながら、この保守本来の意味が、戦後日本の五十年余に渡って正しく理解されてこなかった。理解されていたのは、現状維持としての保守についてだけであった。しかし、戦後の現状たるや、いたずらなる改革の連続ということであったのだから、保守の意味は千々に乱れざるを得ない。与党たる自民党が、様々な改革の要求に、というよりも、破壊にも同然の騒擾に便乗したり迎合したりすることが少なくなかったのは、この保守としての姿勢を堅持できなかったことに起因している。

このあたりの思想的な経緯を、西田氏は過不足無く把握している。つまり、歴史的なるものの保守こそが、氏の政治姿勢の根幹をなしている。私はこのことを、氏との友人付き合いのなかで、幾度も確認している。また、本書を読めば、政治家・西田が改革における誤謬や歪曲を歴史的なるものに基づきつつ、いかに正確に射当てているかが、ただちに明らかになりもする。戦後日本の改革は、かつては歴史破壊の国、ソ連に倣おうとし、その後は歴史不在の国、アメリカに追随をしようとしてきた。そういう似非の改革の誤りは、冷戦の両巨頭が、脱出困難な混乱に見舞われているという事実によって、白日の下に晒されつつある。必要であったのは、近代保守思想の始祖たるエドモンド・バークの言ったこと、すなわち、保

守するための改革である。歴史の英知を保守するために現状を改革する、それ以外に政治の、ましてや自民党の進むべき道はない。

西田氏が本書で展開している政策論は、このような賢明な保守思想によって支えられている。氏が、そう遠くない時期に、我が国の政治の中枢に進み出られることを期待しつつ、本書を読まれる読者の多からんことを念願する次第である。西部邁（平成10年10月）」

過分に私を褒めていただいて、誠に恐縮なのですが、実は私は決してこのような政治家ではなく、政治家というのはこうあるべきだということを、この書の巻頭の助言により、西部先生から教えて頂きました。そして、ここに書かれていることの意味を、私自身が本当に体得するために、この十数年ずっとかかっていたというか、現在も含めそのようにありたいと願っているのです。現在この本は書店にはないかもしれませんが、私の事務所やインターネットでは注文できます。ぜひ皆様方にも保守とは何なのか、そして、今の日本の国の政治の乱れというのは、自分達の国の歴史的なつながりというものを全く失い、目先のことだけに追われてしまうことを改革と称して、ずっと歴史破壊を行ってきたことに起因するのだということを、共通の認識としていきたいと思っています。その共通の認識を持つことが、本当の意味で日本の国において歴史と政治というものを取り戻し、日本の国を救い出す一番の原点になると思うからです。この話につきましては、回を追って皆様方にお話させていただきたいと思います。ありがとうございました。